

「気になる」子どもの遊びの共有と社会性の発達 —遊びタイプの分類—

東北大学大学院 飯島典子

Sharing Social Play and Social Development of Nursery School Children who Require Special Care. : Classifying Types of Children Play

Tohoku University IIJIMA, Noriko

本研究は、「気になる」子どもの遊びを通じた社会性の発達支援を検討するための測度を開発することを目的として行われた。具体的には、対象児2名について、ルール遊びとコーナー遊びにおける「遊びの種類」「遊びの状態」と、「保育者の働きかけ」について行動分析を行った。また、保育者による対象児の行動評価から、行動分析の結果と実際の子どもの様子との関連をみた。その結果、ルール遊びはコーナー遊びに比べ遊びを共有することができていた。また、遊びの共有には不適切な行動も含まれていたが、Ⅱ期になると共同的な遊びの共有が増加する傾向にあった。これらの結果は、保育者の行動評価と類似しておりカテゴリーによる分析が可能であると思われた。

【キー・ワード】 「気になる」子ども、遊びの共有、ルール遊び、自由遊び、保育所

The purpose of the present study was to make the measure about sharing of social play. Subjects were two children with special educational needs. There were observed in the rule-play session and the free-play session. Nursery teacher assessed children behaviors in nursery school.

The major results were as follows:

1. Many shares were observed in the rule-play session than free-play session.
2. There were much inappropriate behaviors in the free-play session.
3. The sharing increased from period I to period II.
4. It was suggested that the more detailed category of shared play was required.

【Key Words】 child with special educational needs, share in peer play, rule-play, free-play, nursery school

問題と目的

近年、知的側面には顕著な遅れは認められないにもかかわらず、「感情をうまくコントロールできない」「他児とトラブルが多い」などの特徴をもつ、いわゆる「気になる」子どもに対する保育の進

め方について多くの問題が指摘されている（本郷, 2003）。「気になる」子どもは自己制御や他児との関わりに困難を抱えているため、集団場面において不適切な行動をとることが多く、社会的な問題が発生する場合がある。とりわけ、遊び場面では他児と遊びを共有できないという問題が生じる。これまで、行動上に社会的な問題をもつ子どもに対しては、子ども自身の社会的発達の課題に応じたソーシャルスキルトレーニングによって、適切な行動の獲得を促す取り組みに焦点があてられることが多かった（例えば Michelson, L. et al, 1983; Asher, S. R. & Coie, J. D, 1990）。しかし、就学前児の子どもでは、クラス集団をいくつかのグループに分けてルール遊びを行うことは、「気になる」子どもの日常場面でのルール違反の減少と関連することが示唆されており（本郷, 2006）、日々の生活の中で社会的発達を促すことが可能である。むしろ個別場面に比べ、遊び場面の方が楽しみながら進められるだろう。したがって、保育の場における「気になる」子どもの社会性の発達には、ソーシャルスキルトレーニングといった個別の発達を促すよりも、他児と遊びを共有する中で他児との関わりを経験を促す必要があると思われる。

しかしながらこれまで、「気になる」子どもと他児との遊びの成立といった観点からの検討はほとんどなされていない。そのため、どのような方法をとることで「気になる」子どもの社会的行動を遊びの中で伸ばしていくことができるのか、あるいはその際の課題点は何であるかといったことが明らかになっていない。保育の場では保育者による遊びの介入が、幼児の遊びの成立に対し「足場づくり」（Bruner, 1983）の役割を果たしており（例えば、高濱, 1993 ; 田中, 2007 など）、「気になる」子どもが独自の力では遊びを共有できない場合でも、保育者の働きかけによっては「気になる」子どもが遊びを共有することが可能となる。したがって、「気になる」子どもが他児と遊びを共有する際の、難しい点と、比較的容易な点を明らかにすることで、適切な遊び経験を「気になる」子どもに提供する必要があると思われる。

Parten (1932) は、子どもの遊びを「一人遊び」「傍観」「平行遊び」「連合遊び」「協同遊び」に分類した。「協同遊び」の状態が複数の子どもの社会的な相互交渉によって遊びが共有された状態として捉えられている。しかし、Parten の遊びの分類は集団形態に着目したものであって、遊びの共有の成否を必ずしも示していない。無藤 (1997) は、子どもは遊び場面において他児と同じ行動をすることで遊びの意味や意図を共有できるとしている。そして、それは自閉症といった社会的相互交渉に障害をもつ子どもであっても、部分的な行為共有によってもごっこ遊びが成立する（宇田川, 2004）。このことから、遊びの共有は相互に協同的に展開するだけでなく、いくつかの次元があると思われる。したがって、社会的相互交渉に問題をもつ「気になる」子どもの遊びの共有は「協同遊び」という一語では整理できず、他の次元も考慮して捉える必要があると思われる。また、飯島 (2007) は遊びの種類を「感覚運動遊び」「構成遊び」「象徴遊び」「ルール遊び」によって分類しているが、いずれも「一人遊び」と「協同遊び」の2つの形態がある。したがって、「気になる」子どもの興味関心の種類や、行動特徴によって遊びの共有の成否が異なるのではないと思われる。したがって、「気になる」子どもの遊びを通じた社会性の支援にあたっては、その特徴に応じて支援の方法を変えながらすすめて行く必要があるだろう。

しかし、社会的行動上に問題のある子どもが、保育の中で遊びを経験することでどのように変化す

るかといったことに対する研究は、事例による検討はあっても、量的に検討したものは少ない。事例検討では子どもに生じた社会的変化が「気になる」子ども全般に共通して生じるものであるか、それとも特定の個人においてのみ生じるものであるかが明らかにされない。「気になる」子どもが示す行動特徴はさまざまであるが、その中でも共通した部分や関連した部分があることを踏まえると、むしろ、「遊びの共有」における特徴や課題を量的に整理することで、より効果的な支援のあり方を探ることができると思われる。

そこで、本研究では、「気になる」子どもが他児と遊びを共有することで、社会性の発達を支援していく方法を検討できるような遊びの測度を開発することを目的とした。なお、調査は現在も実施中であるが、今回は測度の検討を行うために、既に縦断的に収集されている 2006 年のデータを用いて遊びの分析を行うこととした。

方 法

1. 調査期間

2006 年 5 月～2007 年 3 月。Ⅰ期（5 月～7 月）、Ⅱ期（10 月～11 月）、Ⅲ期（2 月～3 月）に分けられ、このうちⅠ期とⅡ期について報告する。

2. 対象児

保育者から「気になる」子どもと報告された R（男児，4 月 2 日現在の年齢が 4 歳）と T（男児，4 月 2 日現在の年齢が 5 歳）の 2 名について検討を行った。R と T の概要は次の通りであった。

R；4 歳児クラスに所属し、担任は 1 人だけであった。R は普段から落ち着きがなく、自分より弱い子に対して暴力的な行為をするなどの特徴があった。

T；5 歳児クラスに所属していた。このクラスは、統合の子どもも所属していたため担任は二人体制であった。T は自分から遊びを見つけることができず、無目的に歩き回ることが多かった。

また、自分の思いや要求を言葉で伝えることに難しさをもつなどの特徴があった。

3. 調査方法

調査は保育者による対象児に関するチェックリストの記入と行動観察が行われた。

(1) チェックリスト

保育者の対象児に対する「気になる」点がどのような事柄にあるのかを整理するために、「気になる」子どもの行動チェックリスト（D-3 様式）（本郷他，2006）を用いた。このチェックリストは、5 領域（各領域 12 項目）60 項目から構成され、保育者は各項目に「まったく気にならない」（1）から「たいへん気になる」（5）の 5 段階で評定するように求められた。また、集計に当たっては、「保育者との関係」「他児との関係」「集団場面で見られる様子」「生活・遊びの場面で見られる様子」「その他の様子」といった領域別得点と「対人的トラブル」「落ち着きのなさ」「状況への順応性の低さ」「ルール違反」「衝動性」といった因子別得点が算出できるように構成されていた。

(2) 行動観察場面

観察は、対象児が登所してから昼食までのおよそ1時間半について行った。対象児の行動および保育全体の様子はVTRを用いて記録された。報告では、このうち集団活動場面の「ルールのある遊び活動場面（以下、「ルール遊び場面」と記述する）」と遊びによってコーナーが設けられた自由遊び場面の「コーナー遊び場面」の二つの場面について分析を行った。各活動はそれぞれ遊びが行われていた10分間を分析の対象とした。

(3) 分析カテゴリーと分析方法

遊びをカテゴリー分析するにあたっては、他児と遊びを共有できているかどうか（遊びの状態）、どのような遊びをしているか（遊びの種類）、保育者による足場作りがあるかどうか（保育者の働きかけ）の3つの点から分析することとした。

①遊びの状態

他児と遊びを共有することができるかどうかについては、遊びの「成立」と「非成立」に焦点をあてた。表1には遊びの状態の特徴がまとめられている。「成立」では共有の仕方によって成立形式を「協同共有型」「受容共有型」「動作共有型」の3つに分類した。「非成立」では他児と同じ場面にいるかどうかによって「場面の共有」「逸脱」の2つに分類した。

分析にあたっては、10秒を1フレームとし、遊びの状態をカウントした。この際、2つ以上の状態が確認された場合は、そのフレームを多く占めている状態をカウントした。

表1 遊びの状態カテゴリー

カテゴリー		内容	例
遊びの成立	協同共有型	遊びに相応しい行動をし、他児と同じものを使ったり、一緒に遊ぶことへの楽しみを表現しながら遊びが成立する	・ごっこ遊びの役割を決めている ・リレーで他児が走っているのを応援したり、勝つと他児と一緒に喜ぶ
	受容共有型	他児と一緒に遊ぶことへの興味、関心を示しているが、行動面で不適切な部分があるため、他児の受容によって遊びが成立する	・他児への遊びに関心を示し近くによって見る ・椅子とりゲームで反対方向に歩く
	動作共有型	明確な共有志向性が示されていないが、他児との行動に関連があるため遊びが成立する	・集合ゲームなどでルールは理解できなくても、周囲の動きに合わせることで遊びが成立する
非成立	場面の共有	他児と関連のない行動や、場面に不適切な行動をするため、遊びが成立しない	・ブロックコーナーで一人だけ折り紙をしている
	逸脱	場面とは別のところにいる	・クラスから出てしまう

②遊びの種類

遊びの種類は飯島（2007）を参考に、「感覚運動遊び」「構成遊び」「象徴遊び」「ルール遊び」「非遊び」の5つに分類した。表2にはそれぞれの遊びの特徴と代表される遊びをまとめた。

分析にあたっては、10秒を1フレームとし、対象児が行っている遊びの種類をカウントした。この際、同フレーム内で2つ以上の遊びがあった場合は、そのフレームで多く行われていた遊びについてカウントした。また、遊びが複合的に展開される場合（例えば、ブロックを使ったごっこ遊びなど）は、遊びを進行させるうえで中心となる遊びを取り上げた。

表2 遊びの種類カテゴリー

カテゴリー	遊びの特徴	遊びの例
感覚運動遊び	感覚を使ったり、運動することが主な内容の遊び	リレー、すべり台、身体接触など
構成遊び	物を構成することが主な内容の遊び	ブロック、ねんど、お絵かきなど
象徴遊び	イメージを用いて、ふりをすることで展開されることが主な内容の遊び	ごっこ遊び、ふり遊び
ルール遊び	ルールに応じて遊びが展開されることが主な内容の遊び	おにごっこ、カルタなど
非遊び	明確な遊びのない無目的な動き	ふらふら歩き回るなど

③保育者の働きかけ

保育者の働きかけは、田中（2007）を参考に、「促進」「ガイド・援助」「参加・見守り」「なし」の4つに分類した（表3）。また、保育者が働きかける相手は「対象児」「他児」「集団」に分けられた。なお、保育者が2名以上いる場合は、集団の補助に主に関わっている保育者を分析対象とした。

分析にあたっては、10秒を1フレームとし、働きかけの頻度をカウントした。この際、同じ行動が何回観察されても「1」と記録した。

表3 保育者の働きかけカテゴリー

働きかけ	内容	例
なし	対象児が活動している場面对し、直接的な関わりがない	コーナー遊びで対象児がいるところとは別のコーナーに保育者がいる
参加・見守り	成員の一人として遊びに加わったり、子どもから少し距離を置いて集団を見ている	コーナーに入っているが、特に子どもへ働きかけがない
ガイド・援助	子どもがその場にふさわしい行動をとることができるように働きかける	トランプの順番が来たことを教える
促進	遊びそのものがスムーズに展開するように働きかける	遊びの進行役をする

結果と考察

集団活動場面における「ルール遊び場面」は集団活動であり、自由遊び場面における「コーナー遊び場面」は自由な活動場面であるため、場面ごとで遊びの性質が異なっている。そのため、「気になる」子どもは遊びの参加状態が異なると思われる。そこで、「ルール遊び場面」と「コーナー遊び場面」それぞれについて検討を行なった。

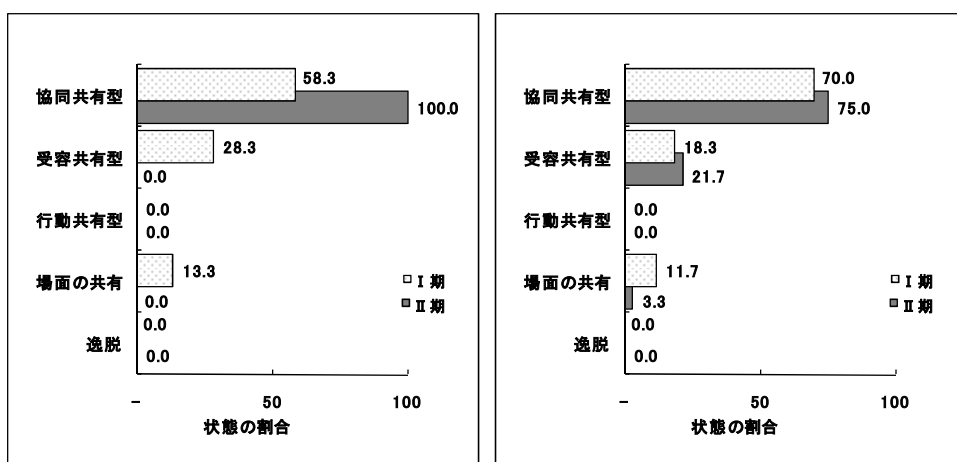
1. ルール遊び場面

「ルール遊び場面」は集団で行う設定活動に組みこまれていることから、保育者が子どもの状態に応じて遊びを設定し、保育者が中心となってクラス集団全体で遊びが行われる。したがって、ここで

は、幼児は保育者の指示や集団全体の動きに従うことが求められ、それに応じた行動をすることで、協同的に遊びを共有することになる。

図 1 に R と T のルール遊び場面における遊びの状態を 60 フレームに対する割合で示した。ここから、R は I 期、II 期ともに「協同共有型」が最も高く、II 期では「協同共有型」が 100% とルール遊び場面全体を通じて協同しながら他児と遊びを共有することができていた。また T においても、I 期、II 期ともに「協同共有型」が最も高い結果であった。

本郷（2007）は、ルール遊びはどのように振舞えば良いか理解しやすいため「気になる」子どもにとっても進め方や工夫によって参加可能であるとしている。本研究の対象児においても同様に、ルール遊びは比較的容易に参加できる遊びであったといえる。



(R) (T)
図 1 ルール遊び場面での遊びの状態

しかし、I 期においては R、T ともに「受容共有型」もみられ、他児と遊びを共有する中で不自然な行動も生じていた。これは、ルール遊びの進行と関連していた。例えば R の I 期は「椅子取り」ゲームを行ったが、一人担任であったことから、音楽の調節や、椅子を減らし、負けた子どもたちの位置を定めるなどの遊び全体の進行を担当が一人で行う必要があった。そのため、保育者が準備をしている合間は子どもたちに無目的な時間となってしまう。このような事態になると、行動をコントロールできない R は待つことができずに不適切な動きが生じてしまった。このようなことから、「気になる」子どもにとって参加しやすいルール遊びであっても、子どもの特性を踏まえて遊びを設定し、進行させていく必要があると思われた。

2. コーナー遊び場面

コーナー遊び場面は、保育者によっていくつかの遊びが準備され、そこに加わった少数の集団で遊びが行われる。このとき、どのコーナー遊びに属し、誰とどのように遊ぶかは子どもたちの自由な活動によって決定されるため、幼児は独力で遊びを展開することが求められる。したがって、遊びを一

緒に展開したり、それぞれの遊びが進行するために調整できるほど協同的に遊びを共有することになる。

コーナー遊び場面では複数の遊びが設定されている。そこで、遊びの種類ごとに遊びの状態について60フレームに対する割合をまとめた。

表4はRについての結果である。ここから、I期では95.0%が「構成遊び」であり、遊びの状態は「動作共有型」が91.7%を占めていた。II期になると、「構成遊び」(85.0%)を主にしているが、「象徴遊び」(13.3%)も出現している。遊びの状態をみると、「動作共有型」が75.0%とI期から減少し、「協同共有型」が20.0%と増加していた。

表4 コーナー遊び場面での遊びの出現状況と状態（R）

種類 状態	I期で出現したもの(%)			II期で出現したもの(%)			
	構成 遊び	非遊び	全体	構成遊び	象徴 遊び	非遊び	全体
協同共有型	1.7		1.7	10.0	10.0		20.0
受容共有型							
動作共有型	91.7		91.7	75.0			75.0
場面の共有					3.3		3.3
逸脱	1.7	5.0	6.7			1.7	1.7
全体	95.0	5.0	100.0	85.0	13.3	1.7	100.0

次に、表5はTについての結果である。ここから、I期では「非遊び」(51.7%)と「構成遊び」(48.3%)の2つを行っていた。遊びの状態は「逸脱」(51.0%)と「動作共有型」(46.7%)の2つの形態のみであった。II期になると、遊びの種類は「象徴遊び」(63.3%)が最も多かった。また、遊びの状態は「逸脱」は全く見られず、逆に「協同共有型」が「感覚運動遊び」と「象徴遊び」を合わせて60.0%とI期に比べ増加していた。しかし、「象徴遊び」において「受容共有型」も見られた(16.7%)。

表5 コーナー遊び場面での遊びの出現状況と状態（T）

種類 状態	I期で出現したもの(%)			II期で出現したもの(%)			
	構成 遊び	非遊び	全体	感覚運動 遊び	象徴 遊び	非遊び	全体
協同共有型				25.0	35.0		60.0
受容共有型					16.7		16.7
動作共有型	46.7		46.7				
場面の共有	1.7		1.7		11.7	11.7	23.3
逸脱		51.7	51.7				
全体	48.3	51.7	100.0	25.0	63.3	11.7	100.0

これらのことから、自由遊びでは「気になる」子どもは、同じ場所で同じ動作をすることで結果として遊びを共有する「動作共有型」が多く、協同的に遊ぶのは難しいと思われる。しかし、II期になって「協同共有型」が増加していたことから、「気になる」子どもでも自由な遊びの状況において遊

びを共有することは可能である。とりわけ、RとTはⅡ期になって「象徴遊び」による「協同共有型」が出現している。これはごっこ遊びを行っていたことを示す。すなわち、対象児は遊びのイメージといった抽象的なものを共有し遊びを展開していた。このようなことができるようになってきたことは、遊びを通じ他児との相互交渉が豊かになってきていることを示唆するものであろう。

3. 保育者の働きかけ

表6, 7には保育者の働きかけた相手について、図2～5には働きかけの内容についてのフレーム数の結果が示されている。ここから、まずRの保育者は「ルール遊び場面」ではⅠ期, Ⅱ期ともに「集団」に働きかけることがほとんどであった。働きかけの内容は、「ルール遊び場面」ではⅠ期は「促進」が多く、Ⅱ期は「参加・見守り」が多かった。「ルール遊び場面」では、Rの保育者は「集団」に対しⅠ期では「促進」することが多く、Ⅱ期では「参加・見守り」をすることが多かった。「コーナー遊び場面」ではⅠ期, Ⅱ期とも対象児が属するコーナーに保育者が関わることはほとんどなかった。

表6 保育者の働きかけの相手 (R)

働きかけの相手	ルール遊び場面		コーナー遊び場面	
	I期	Ⅱ期	I期	Ⅱ期
対象児	1	0	0	1
他児	7	5	0	9
集団	53	53	1	16
合計	61	59	1	26

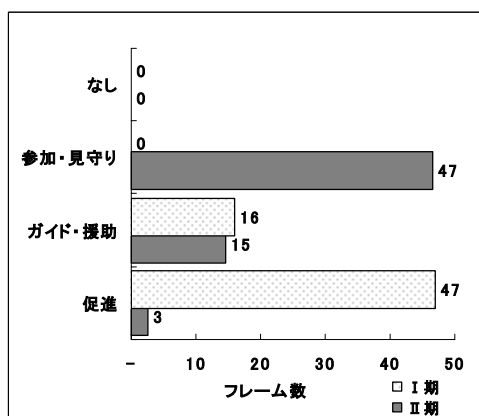


図2 保育者の働きかけの内容 (ルール遊び場面; R)

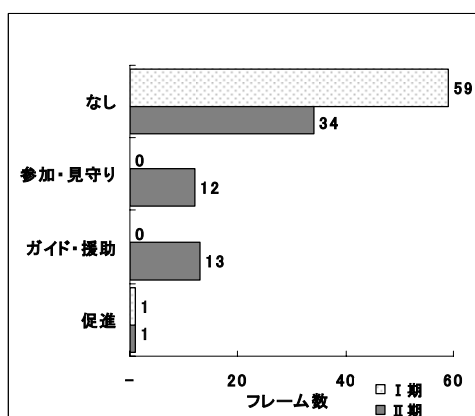


図3 保育者の働きかけの内容 (コーナー遊び場面; R)

次にTの保育者は「ルール遊び場面」ではⅠ期, Ⅱ期ともに「集団」に働きかけることが多く、「参加・見守り」を多くしていた。「コーナー遊び場面」では、Ⅰ期では、「対象児」「他児」「集団」に「促進」をする場合と、Tとの関わりがない場合があった。Ⅱ期ではほとんどTが属するコーナーに保育者が関わることはなかった。

表7 保育者の働きかけの相手 (T)

働きかけの相手	ルール遊び場面		コーナー遊び場面	
	I期	II期	I期	II期
対象児	5	0	8	0
他児	6	9	8	0
集団	50	51	14	4
合計	61	60	30	4

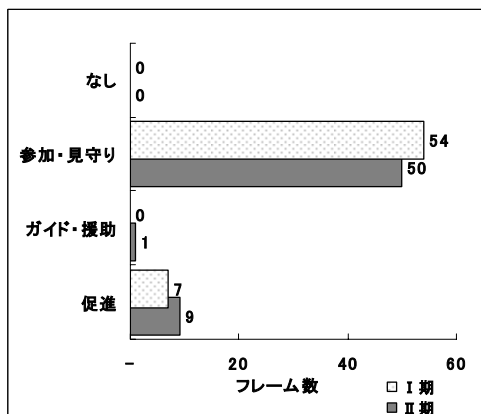


図4 保育者の働きかけの内容 (ルール遊び場面 ; T)

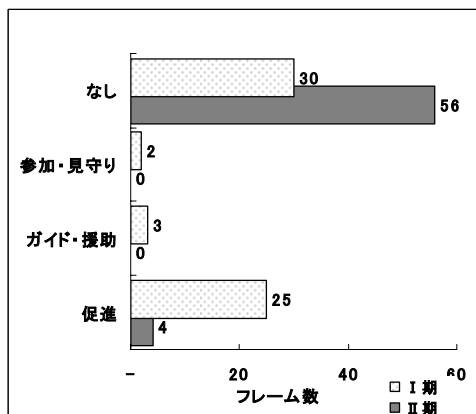


図5 保育者の働きかけの内容 (コーナー遊び場面 ; T)

これらのことから、保育者は遊びの種類や内容、子どもの状態などにより、働きかけの内容や働きかける相手を変化させていると思われる。そのため、保育者の働きかけと「気になる」子どもの遊びの成立については、今後、子どもの行動特徴や遊びの種類、および支援の目的などから詳しい検討が必要だと思われる。

4. チェックリストの結果

行動観察ではII期において「協同共有型」の増加が見られた。この変化が、実際の「気になる」子どもの行動の変化を説明できるかどうかを見るために、保育者が対象児を「気になる」と感じる程度にも変化が生じているのかについても検討が必要である。このような点から表8、9には「気になる」子どもの行動チェックリスト (D-3 様式) の領域別得点と因子別得点を示した。

ここから、Rの領域別得点での主な減少は、「保育者との関係」「集団場面」に見られ、因子別得点では「対人的トラブル」と「ルール違反」において主な減少が見られた。Tで減少した主なものは、領域別得点では「集団場面」が、因子別得点では「対人的トラブル」「状況への順応性の低さ」「ルール違反」であった。

このように、RとTは「集団場面」や「ルール違反」で気になる程度が減少している点は、遊び場面における「協同共有型」の増加と関連していると思われる。したがって、カテゴリによる遊び場面の分析は、「気になる」子どもの行動特徴についての検討が可能であると思われる。今後は、対象

児を増やし、より詳細にカテゴリーによる分析を行っていく。

表8 対象児の行動特徴の変化（R）

	領域別得点				因子別得点		
	I期	II期	II-I		I期	II期	II-I
a 保育者との関係	3.8	3.1	-0.7	①対人的トラブル	3.8	2.7	-1.2
b 他児との関係	3.3	2.9	-0.3	②落ち着きのなさ	3.5	3.0	-0.5
c 集団場面	3.2	2.5	-0.7	③状況への順応性の低さ	3.8	3.3	-0.5
d 生活・遊び場面	2.8	3.0	0.2	④ルール違反	2.7	2.0	-0.7
e その他	2.4	2.3	-0.1	⑤衝動性	3.7	4.2	0.5

表9 対象児の行動特徴の変化（T）

	領域別得点				因子別得点		
	I期	II期	II-I		I期	II期	II-I
a 保育者との関係	3.5	3.2	-0.3	①対人的トラブル	3.8	3.0	-0.8
b 他児との関係	3.3	2.9	-0.4	②落ち着きのなさ	3.7	4.3	0.7
c 集団場面	4.5	3.8	-0.8	③状況への順応性の低さ	4.2	3.5	-0.7
d 生活・遊び場面	3.8	3.8	0.0	④ルール違反	4.5	3.8	-0.7
e その他	2.2	3.0	0.8	⑤衝動性	3.5	3.3	-0.2

討 論

本研究は、「落ち着きがない」「自分の感情をうまくコントロールできない」「他児とトラブルが多い」などといった行動特徴が理由で、他児と遊びを共有することが難しい「気になる」子どもについて、遊びを通じた社会性の発達支援を検討するための測度を開発することを目的として行われた。具体的には遊びの種類によって、他児との遊びの共有に違いが生じるのか、どのような点が要因となって共有が難しくなるのかを検討するために、「ルール遊び場面」と「コーナー遊び場面」における遊びの共有について、「遊びの種類」、「遊びの状態」と「保育者の働きかけ」（相手と内容）の3つの観点から分析を行った。また、これらの分析の結果と実際の子どもの様子の関連を見るために、保育者による対象児の「気になる」程度の評価を求めた。

その結果は大きく、遊びの種類によって共有のしやすさは異なることと、遊びの共有の仕方に「気になる」子どもの特徴が見られることが明らかになった。

まず、「気になる」子どもはどのような行動をとれば良いかがわかりやすいルール遊びの方が自由遊びに比べ比較的早くから他児と遊びを共有できていた。「気になる」子どもは遊びの方向性が示されている「コーナー遊び場面」であったとしても他児と遊びを共有することが難しいことがうかがえた。このような場合には、保育者が遊び集団に加わることで、他児との関わりを仲介するような働きかけが必要になるとと思われる。実際、TにおいてはI期で保育者が介入していないときはふらふらと

無目的に歩き回り、誰とも関わることができていなかったが、保育者が「参加・見守り」を開始したことで、遊び場面に加わり「動作共有型」ではあるが他児と遊びを共有できていた。

次に、「気になる」子どもの遊びの共有形式は不自然な部分が含まれる特徴があった。「遊びの状態」は、「気になる」子どもが他児と遊びを共有しやすい「ルール遊び場面」であっても、Ⅰ期では「受容共有型」が見られた。「受容共有型」は対象児が遊びを共有する姿勢が見られるものの、共有には不自然な動きが見られ、他児がそれを受け入れるか、拒否するかによって遊びの成立が異なるものである。たとえば、RのⅠ期で行われた「椅子取りゲーム」では、Rは進行方向とは全く関係なく、他児にぶつかりながら動いていた。このRの行動は「自分の行動をうまくコントロールできない」というRの困難さが現れたものである。このような傾向はTにおいても生じていた。Tの「コーナー遊び場面」ではⅡ期において「象徴遊び」が行われた。Tは自分の思いや要求を言葉によって伝えることに難しさをもっていたため、他児に近づき遊びを見るなど不自然な働きかけによって共有を試みていた。「気になる」子どもが、通常の遊び場面では生じないような不自然な共有の仕方でも遊びに参加していても、他児と遊びを共有できるかは、他児がそれを拒否したり、非難したりしないことが大きく関わっていた。

以上のように「気になる」子どもが遊びを共有する際の行動特徴を示すことが出来たことから、本研究で用いられた測度は妥当なものであったと思われる。しかし、「気になる」子どもは行動制御や相互交渉の方法に難しさをもつため、共有志向性が見られるようになり他児と遊ぶようになっても不自然な行動が含まれてしまう場合がある。そして、そのような不自然な行動は徐々に減少することも多く、遊びの協同共有への発達的变化は時間をかけて行われると思われる。したがって、「気になる」子どもの遊びの検討においては「受容共有型」を詳細にみる必要があるだろう。本研究では、「受容共有型」に含まれる行動は否定的な行動であったり、表現性が乏しいものであったりといくつかの種類が存在していた。この違いは「気になる」子どもの問題点や課題点と関連する部分が多かった。そこで今後は、「受容共有型」の中に下位水準を設け、「受容共有型」の中でもどのような行動特徴が他児と遊びを共有する上で問題となるのかについても検討を行う。また、「気になる」子どもが遊びを共有できるようになる過程には保育者による支援が必要な場合が多い。保育者は、子どもの行動特徴や実施している活動の内容に合わせて支援の方法を変えている。そこで今後は、「保育者の働きかけ」の種類を遊びの内容や子どもの特徴に応じたものに修正することで、支援の効果が明確になるようにしていく必要があると思われる。

本郷（2007）は「気になる」子どもがルール遊びをすることを通じ、他児と関わる経験や他児と楽しい時間を過ごす経験を積み重ねる中で、「気になる」子どもや他児の社会性の発達が促されるとしている。保育者の対象児に対する「気になる」評価のうち「集団活動」や「ルール違反」において減少が見られたことから、遊びを通じた社会性の発達は、単に遊びの中だけに限定されるものではなく、相互に関連しあっているものであると思われる。今後は、遊び場面と日常場面とは相互に関連して発達していくという観点にたち、「気になる」子どもが他児と一緒に遊ぶことの楽しさを通じ、どのように社会性を伸ばしていくのかを検討することで、「気になる」子どもの社会性の発達支援へとつながる視点を明らかにしていく。

引用文献

- Asher,S.R.&Coie,J.D. (1990) Peer rejection in childhood. 山崎昇監訳. (1996). 子どもと仲間の心理学：友だちを拒否するところ. 北大路書房
- Bruner,J. (1983). *Child's talk ; Learning to use language*. Oxford University Press.
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子 (2003). 保育の場における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究. 発達障害研究, 25, 50-61
- 本郷一夫 (編著) (2006). 保育の場における「気になる」子どもの理解と対応—特別支援教育との接続—. ブレーン出版
- 本郷一夫・飯島典子・平川久美子・杉村僚子(2007). 保育の場における「気になる」子どもの理解と対応に関するコンサルテーションの効果. LD 研究, 16, 254-264
- 飯島典子 (2007). 遊び (本郷一夫編著. 発達心理学—保育・教育に活かす子どもの理解—). 建帛社. pp89-100
- Michelson,L.etal. (1983). *Social skills assessment and training with children*. 高山巖ほか訳. (1987). 子どもの対人行動：社会的スキル訓練の実際. 岩崎学術出版社
- 無藤隆 (編著) (1997). 協同するからだごとば—幼児の相互交渉の質的分析. 金子書房
- Parten, M. B. (1932). Social participation among preschool children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 27, 243-269
- 高濱裕子 (1993). 幼児のプラン共有に保育者はどのようにかかわっているか. 発達心理学研究, 4(1), 51-59
- 田中浩司 (2007). 遊びの成立における大人の足場づくり—ルール遊びの成立・発達過程の分析—. 心理科学, 27(1), 32-44
- 宇田川久美子 (2005) 自閉傾向のある子どもとのコミュニケーション的場を広げる—真似ることの役割とその意義—. 保育学研究, 43(1), 27~38

謝 辞

論文の作成あたってご助言をいただきました東北大学大学院本郷一夫先生に深く感謝いたします。

附 記

本研究で用いられたデータは、東北大学大学院本郷一夫教授による『「気になる」子どもの理解と対応』プロジェクトのデータを本郷教授の了解を得て、一部再分析したものである。